

## ‘On First Looking into Chapman’s Homer’における 「歴史的発見」のイメージの多義性

金澤 良子

### 序

‘On First Looking into Chapman’s Homer’はJohn Keatsの初期の作品群の中では、比較的評価が高いものとして挙げられる。多くの批評家によってその卓越したスタイルやリズムの素晴らしさが指摘されると同時に、キーツにとって書物から得られるインスピレーションが、いかに後の詩作に重要であったかなどを論じる上でも引き合いに出されてきた。ところで、このソネットの六行連句でキーツがチャップマン訳のホーマーを読んだときの気分を「新しい惑星が視界に入ってきたときに空を見つめている者のように感じた」(9-10)としている箇所にMartin Askeは注目し、「“watcher”と“planet”のイメージは見ている側とその対象とを分断する取り消しようのない距離を表している」(Aske 45)と指摘する。アスクは*Keats and Hellenism*の中で古代の偉大なる詩人たちに対してキーツが感じていた“belatedness”を強く主張し、「恒星の光のごとく、古代の所産の力が近代の詩人としての自らの生き残りを脅かすかもしれないということにすでに気づいているかのように、キーツは創作の人生の比較的初期段階で美しいギリシア神話に別れを告げようと考えている」(Aske 46)と考える。

確かにキーツは偉大なる先人に敬意を抱いており、作品はもちろんのこと書簡の中でも古代の詩人の名前を幾度となく挙げている。アスクはキーツの書簡での“I will have no more of Wordsworth or Hunt in particular”“Let us have the old Poets”(L I, 224-25)といった発言から、「彼の過去への忠誠心は近代の不可逆性を彼にいやおうなしに気づかせる」(Aske 43)と指摘する。さらに、1818年4月9日に書かれた書簡の一節でキーツが「劣等感を持つもの」として挙げた“the Memory of Great Men”(L I, 266)を引き合いに出し、「古代の至高の作品の中に祭られた「偉大なる先人たちの記憶」は近代の人々が古代の遺産に頼ることを支えるというよりはむしろ彼らの妨げとなる」(Aske 43)と主張する。だが、これらの書簡はあくまで、1818年に書かれており、チャップマンのソネットが書かれた1816年からみるとだいぶ後ということになる。それだけでなく、これらの書簡はどれも『エンディミオン』を書き終えた後に書かれたものであり、キーツの思想がこの長編詩を書く前と書いた後でまったく変化しなかったとは考えにくい。「詩人の無個性」という点で近代の詩人より優れているとする二月の書簡で言われる“old poets”はエリザベス朝期の詩人を指しており、とりわけ古代ギリシアの詩人に限ってはいない。またアスクが根拠とする「そう遅くならないうちに、再びギリシア神話の美に触れ、その輝きを曇らせてみたい」という『エンディミオン』の序文での言葉だが、これ

も『エンディミオン』完成後の1818年4月に書かれたものであり、いくら大衆の反応は気にしないといっても、序文でのキーツの態度からすると謙遜の気持ちでこう述べたと推測される。『エンディミオン』完成後に“belatedness”を感じていたかどうかはともかくとして、「はじめてチャップマン訳のホメロスを読んで」が創作された1816年の10月というキーツの詩人としての人生の最も早い段階にそうした感情を抱いていたことの根拠を1818年のキーツの発言に求めるのは無理がある。それでは実際にソネットを分析し、アスクが主張するような“belatedness”をこの時期のキーツが「古代の遺産」に対し持っていたのかを当時のキーツの個人的体験と歴史背景を検証しながら、明らかにしていきたい。以下はソネットの引用である。

Much have I travell'd in the realms of gold,  
 And many goodly states and kingdoms seen;  
 Round many western islands have I been  
 Which bards in fealty to Apollo hold.  
 Oft of one wide expanse had I been told 5  
 That deep-brow'd Homer ruled as his demesne;  
 Yet did I never breathe its pure serene  
 Till I heard Chapman speak out loud and bold:  
 Then felt I like some watcher of the skies  
 When a new planet swims into his ken; 10  
 Or like stout Cortez when with eagle eyes  
 He star'd at the Pacific — and all his men  
 Look'd at each other with a wild surmise —  
 Silent, upon a peak in Darien.

(‘On First Looking into Chapman’s Homer’ 1-8)

## 1. Chapmanの再発見

まず注目したいのは、キーツはこの十四行詩の中できわめて細かく時制を使い分け、それが大きな効果を持っていることだ。ここからは時制を念頭に置きながら、ソネットを順に見ていく。

最初の4行は“Much”や“many”といった数の多さを表す言葉が印象的である。このソネットが完成した背景、1816年の10月、Clerkenwellにいた友人のCharles Cowden Clarkeの下宿でGeorge Chapman訳の『オデュッセイア』を夜明けまで読んだキーツが数時間後の朝の十時にはこのソネットを作り上げてクラークの元に届けたというエピソードは有名だ。この状況から考えると、一晩中夢中で読んで、以前に読んだことのあるAlexander Pope訳では味わえなかった、新たなホメロスの世界を十分に堪能した充足感がこの“Much”や“many”といった言葉を生み出させたといえる。同時に

読者にも短いソネットを読む間に、あたかもたくさんの国を旅したような疑似体験を与えている。

また旅をする「国家」を示す言葉が“realms”“states”“kingdoms”と様々な表現で登場する一方で、ホメロスが支配する領土に関しては5, 6行目で“one wide expanse had I been told”とあるように、「話に聞いていた」(5)と過去完了形で語られる。これはもちろんチャップマン訳のホメロスを読む以前にすでに自らがポーブ訳などを読んで感じたり、評判で聞いていたホメロスの偉大さを表しているといえる。しかし、ポーブ訳のホメロスではあくまで“one wide expanse”という漠然としたイメージしか持つことが出来なかっただろう。さらに“wide”と“expanse”が重ねて使われ、「広い」意味が重複して用いられているのも、ポーブ訳のホメロスがキーツにとってはつかみどころのないものであったことを示している。しかし、チャップマン訳を読んだ後では、「広大な広がり」(5)ではなく、その支配領域が“the realms of gold”, “goodly states and kingdoms”, “western islands”という、いわばより具体的な場所のイメージの語に取って変わられる。同じホメロスの作品でも、以前の「話に聞いていた」受動的な段階から、チャップマン訳を読んだ後では「旅をして」「眺め」「鳥々をめぐる」というように能動的な動きに変化していく。ポーブ訳ではあいまいだったホメロスを、チャップマンは鮮明に具体的に臨場感を持って描き出していたことがこのソネットに表れている。アスクがいう「見ている側とその対象とを分断する取り消しようのない距離」(Aske 45)はホメロス自体ではなく、むしろポーブ訳のホメロスにキーツが持っていた「広大な広がり」(5)と表現された距離感である。

次に7, 8行目を見ていくと、ここでは、まさにカウデン・クラークとともに感動を味わっていた過去の瞬間が過去形で語られる。四行目までに、様々な解釈があるのも現在完了形が用いられていることに起因するのだろうが、ここは過去形で語られるカウデンとの一夜の貴重な体験という過去の一地点から、ユリシーズとともに旅をしていた気分がソネットを書いている現在まで継続していると捉えるのが妥当である。

7, 8行目は後に改変が加えられたが、8行目はオリジナルのままである。「チャップマンが声高にそして奔放に語ったのを聞いた」(8)とあるが、ここでアスクは「チャップマンが声高に奔放に語ることで、皮肉にも原作の声をかき消している可能性がある」(Aske 43)としている。だが、Samuel Taylor Coleridgeは1808年にチャップマン訳の原稿とともにSara Hutchinsonに宛てた書簡の中で次のようにチャップマンについて言及している。

Chapman writes & feels as a Poet as Homer might have written had he lived in England in the reign of Queen Elizabeth — in short, it is an exquisite poem. . . . . In the main it is an English Heroic Poem, the tale of which is borrowed from the Greek —

(*English Romantic Hellenism 1700–1824*, 210)

事実、ロマン派詩人たちによるチャップマンの再評価はなみなみならないものであった。ところで、

キーツのソネットで提示される、チャップマンの“loud”や“bold”といった語り口はアスクのいう原作の妨げになるものではなく、ギリシア語に精通していない読者の原作の理解を深めるものなのではないだろうか。チャップマンに関して、キーツ自身は改変前の詩行では、次のように詠っている。

Yet could I never tell what men could mean  
Till I heard Chapman speak out loud and bold.

(‘On First Looking into Chapman’s Homer’ 7-8 Fair Copy)

この七行目の部分は後に“Yet did I never breathe its pure serene” (7) となるわけだが、チャップマンが「声高に奔放に語ってくれる」のを聞くまでは、キーツは「人々が何を言おうとしているのかまったく分からなかった」(7 Fair Copy) のである。さらにこのソネットとほぼ同時期に書かれたソネット、‘How many bards gild the lapses of time!’ に注目する。

How many bards gild the lapses of time!  
A few of them have ever been the food  
Of my delighted fancy, — I could brood  
Over their beauties, earthly or sublime:  
And often, when I sit me down to rhyme,  
*These will in throngs before my mind intrude:*  
*But no confusion, no disturbance rude*  
*Do they occasion; ’tis a pleasing chime.*

(‘How many bards gild the lapses of time!’ 1-8, italics mine)

このソネットの6-8行目で、キーツは「美は私の頭に群れなして押しかけてくるが、私を混乱させるものや、うるさい妨げになるものではなく、むしろこちよい鐘となるのだ」(6-8) としている。ここから、キーツにとって自身の心に直接迫ってくる美は、自らに感動を与え続け、自らの詩作にインスピレーションをもたらす糧となることが分かる。それは翻訳された英語を通じて感知する古の詩人の遺産という形をとっても同じことであろう。コールリッジも先に引用した書簡の中で、次のように述べて、チャップマン訳の持つ比類ない甘美さと美を評価している。

It is an exquisite poem in spite of its frequent & perverse quaintness & harshnesses which are however *amply repaid by almost unexampled sweetness & beauty of language*, all over spirit & feeling.

(*English Romantic Hellenism 1700-1824*, 210, italics mine)

すなわちキーツはチャップマンが「奔放に」「声高に」語ってくれたことにより、これまで巨人として立ちただかっていたホメロスからその美を直に感じ取ることが可能になったといえる。このことはキーツにとっての「発見」の体験であった。

## 2. 「天体観測者」に内包される意味

最後の六行連句に関しては様々な批評家によって研究されつくされているところである。

Then felt I like some watcher of the skies  
 When a new planet swims into his ken;  
 Or like stout Cortez when with eagle eyes  
 He star’d at the Pacific — and all his men  
 Look’d at each other with a wild surmise —  
 Silent, upon a peak in Darien.

(‘On First Looking into Chapman’s Homer’ 9-14, italics mine)

ここでは7.8行目同様、チャップマン訳を読んだときに得た感動が過去形で語られる。また、“astronomer”と“explorer”の二つのイメージの源泉となるものについても、多くの批評家によって研究されている。まず、“Then felt I like some watcher of the skies/ When a new planet swims into his ken” (9-10, italics mine) の箇所に関しては、長いこと、キーツが1811年にもらったとされる、John Bonnycastleの *Introduction to Astronomy* に、William Herschelが天王星を発見したことが記されている事実と拠るとされてきた。しかし、この“watcher”がHerschelのみを指しているのであれば、以下の詩行に登場するCortezのように名前を挙げることも出来たはずだ。ところが、ここで“some”という形容詞がついているのは、Herschelも含め、空を見上げ星を眺めるすべての人々を指すからではないだろうか。さらにこれが天王星発見という特定の歴史的偉業を示しているのなら、“When a new planet *swam* into his ken” というように過去形で書かれるべきだろう。実際、コルテスに関しては“*He star’d at the Pacific*” (12, italics mine) と過去形が用いられ、六行連句の他の動詞もすべて過去形で書かれている。この箇所だけ現在形が用いられているということは、一個人による新発見の歴史であると同時に、個人の体験という事象を越えた、普遍的な真理をも示しているといえよう。すなわち、人には誰でも“a new planet” (10) の発見の機会が与えられており、今まさにキーツはこれまでも存在していたホメロスの作品をチャップマン訳によって「新しい星」として発見しえたのだ。このソネットを受け取ったカウデンはキーツという新たな星の到来を目の当たりにしたであろうし、多くの読者にも新たな発見の可能性という希望を抱かせることがこの“*When a new planet swims into his ken*” (10) という表現が持つ効果といえる。

またこの時代、天文学は急速に発展し、近代科学発展の筆頭ともいえる学問領域のひとつであった

のは言うまでもない。1796年2月に刊行された *The Monthly Magazine* の中で 'History of Literature' と題した特集の第一弾として 'Introduction to the literary History of the Present Period' という記事 (*The Monthly Magazine* 1796 p33) がある。この記事は文学のみならず18世紀のヨーロッパの学問の歴史が主要な国ごとにそれぞれ紹介されている。興味深いのは、「[16.7世紀の言語学者、演説家、詩人や小説家は18世紀のそれと劣らないわけではなく、ある点では優れてさえいる」としながらも、「特に数学や天文学においては望遠鏡や他の観測の計器の卓越した改良により少なくとも好奇心をそそる発見がなされた」とされ、「科学の一部はわれわれの時代がいくらか優れていることを誇りに思えるものである。というのも、芸術に関しては活気を得ているというよりは衰えているからだ」という一節が各国の学問の歴史の紹介の序文として掲載されているところだ。当時のイギリス人にとって、天文学は新たな発見を量産し、自分たちの希望の星である学問の一分野だったことが確認できる。望遠鏡を通して得られる新知識は、近代科学の技術発展を利用した知識習得の花形であったともいえる。

また最近では、Nicholas Roe が、キーツの通っていた Enfield のクラーク校で教鞭を執っていた John Ryland の「きわめて実証的かつ実用的な教授方法」(Roe 34) を明らかにしている。ライランドは、天文学的な知識を生徒に教えるのにそれぞれの星の特徴を書いたカードを配り、グラウンドで実際に生徒に星の動きをまねさせるという 'Living Orrery' なるものを考案した。こうした経験的な授業方法の存在を明らかにした上で、ロウは、ポニーキャッスルの *Introduction to Astronomy* から得た知識というよりも、ライランドがハーシェルと懇意だったことから、実際にキーツが影響を受けたのはハーシェル自身の著作からであった可能性を示す。また「キーツの想像力が "Living Orrery" で遊んだり、学校の望遠鏡で惑星の輝く像を見つめたりしたエンフィールドでの発見の記憶で大きくなっていった可能性は妥当である」(Roe 37) とし、このソネットが「チャールズ・カウデン・クラークにとってはキーツがホメロスを読んだこと以上に彼の想像力を形成した学校時代の豊かさをより広く知らしめるに及ぶ賛辞」(Roe 37) であるとしている。ここから言えるのは、キーツにとって天文学が、遊びのように日々の授業という実生活に組み込まれることで、書物から得た観念的な理論の域を超えて、自らの体験を通して獲得した極めて身近な知識になっていたという事実だ。したがってアスクが主張する「見ている側とその対象とを分断する取り消しようなない距離」(Aske 45) があったというよりは、むしろ対象と自己との距離感が科学の力によって解消されたような感覚を持っていたのではないだろうか。

### 3. 「太平洋発見」に内包される意味

11.12 行目に登場するコルテスの箇所に限っていえば、太平洋を実際に発見したのはバルボアであり、歴史的事実をキーツが誤認しているというテニソンの指摘 "History requires here Balboa" が正しい。(Barnard 571)。おそらく、一行目の "the realms of gold" (1) がバルボアの黄金探索を示しているとするれば、コルテスの記述はキーツの誤りであることに間違いはない。ここでは発見者の誤りに注

目するよりは太平洋発見という「新発見」をしたという事実が意味を持つのではないだろうか。太古の時代から存在していた太平洋が航海術の発展により、近代人によって「新発見」されたように、ホメロスの『オデュッセイア』や『ユリシーズ』もチャップマン訳によりキーツは「新発見」しえたのだ。

ところで、同じ「新発見」でも、“a new planet” (10) は1781年の天王星の発見をはじめとした当時の天文学の発展の象徴であり、近代科学が勝ち得たキーツにとって身近な知識であったのに対し、この11.12行目に登場するコルテスの太平洋発見は1513年という16世紀初頭の出来事であるのでいささか古めかしく感じるだろう。また、興味深いのはテニスンが指摘するまでキーツの周囲の誰一人としてこのコルテスとバルボアの誤りに気づいていなかったという事実である。おそらく、彼らにとって太平洋発見は、書物で得る過去の歴史的一発見であり、他の歴史的事象と混同する可能性のある知識でしかなかったといえる。キーツが実際に太平洋を目にする体験をしているはずはないので、このバルボアの「太平洋発見」の歴史をキーツもまた書物から得たはずだ。その出所としては二つの可能性がある。一つは、エンフィールドの図書館にあったとされる1777年に出版されたRobertsonの*History of America* (I, 289-90)で、もう一つは、1796年に出版されたWilliam Gilbertの*The Hurricane*における筆者自身が加えたコメントである。後者は、*The Excursion*の第三巻の註で次のように引用されているのをDe Selincourtが指摘している。

... the man of Mind ... would certainly be swallowed up by the first Pizarro that crossed him. But when he ... contemplates, from a sudden promontory, the distant, vast Pacific – and feels himself a freeman in this vast theatre ... his exaltation is not less than imperial.

(*The Excursion* (1814), III 931n. italics mine)

Vincent Neweyは、最後の“imperial”という言葉に注目し、コルテスの征服者としてのイメージと合わせて、イギリスの帝国主義を「チャップマン」のソネットに見出している(Newey 184-85)。太平洋に限らず、島国であるイギリスは古くから海と深く関わっており、この時代はイギリス海軍とともにナポレオンの野心を打ち砕いたイギリス商船隊は世界で群を抜いて最大であった。ジョージ四世の治世(1820-30)に、その総トン数はおよそ250万トンに達したが、依然として風と帆で航行していた。キーツが日ごろからこうした帆船を目にする機会があったに違いなく、遠い日々の探検家の航海に思いを馳せていた可能性は十分にありえる。

また工業技術の進歩はブリテン島への進入路と港湾を変えつつあり、1800年から1830年までの間にトリニティハウスがイングランド沿岸に灯台と浮標灯を設置した。ロンドンの港湾施設は急速に整備され、テムズ河口はイギリスのみならず世界の貿易の中心として従来どおり揺ぎ無い地位を占めていた。選挙法改正法案の前夜には、この国の船舶の四分の一をロンドンが所有し、登録していた。その中には、喜望峰を回ってインド・中国へ向かう六ヶ月を超える航海のために建設された東インド会

社の大型化快速帆船も含まれていた。第二位は20万2千トンの船舶を所有するニューカッスルで、主に石炭船でその多くはロンドンへの輸送に用いられた。第三位はリヴァプールの16万2千トンで、主としてアメリカ貿易にあてられた。実際、キーツ自身船医としてインド貿易船に乗ることや南アメリカに移住することなど海を越えて新世界に旅立つことを現実的に考えていたことが後の書簡から窺える。また弟のGeorgeは夫婦でアメリカに移住し、キーツ自身も後に病氣療養のためにイタリアに向かうこととなるのだった。キーツにとって広大な海は征服不可能な遠い存在、すなわちアスクが主張する「見ている側とその対象とを分断する取り消しようのない距離」(Aske 45)として自己と「古代の栄光」を断絶するものではもはやなかったといえる。こうした時代背景からすれば、コルテスの征服者としてのイメージがイギリスの海での覇権の掌握と難なく結びつくのも当然だろう。Neweyはこの後キーツの金銭的苦労から実利主義者の側面をこのソネットに見出していく。

だが、海の覇権を掌握していたというイギリスの帝国主義的な一面と同時に考えなければいけないことがある。この時代、中産階級の興隆はめざましいものだったが、Peter Earleの*The Making of the English Middle Class*によると、都市部の中産層においては製造業よりも商業従事者の方が多くの遺産を遺す傾向があり、さらにその中でも高額の遺産を遺す者はほとんどが貿易に従事する貿易商人であったことがわかる。海外貿易に携わることは消費の変化を生んだ階層において経済的にその基礎を支えていたのだ。都市部の中産層形成に関しても貿易商人がその中核をなしていたことがうかがえる。またMargaret Huntの*The Middling Sort Commerce, Gender, and the Family in England 1680-1780*によれば中産層のアイデンティティの形成において、貿易を中心としたビジネスとの関わりは重要な拠り所となっていたという。「middling sortは大規模であれ小規模であれ成功するにせよ失敗するにせよ、有形のものであれ、無形のものであれ、事業を計画し実行する人々によって構成されていた…(中略)…middling sortは彼ら自身をindependenceがあると自負していた。それは公務員や東インド会社関係者など技術的には被雇用者に分類されるものでも、彼らは彼らより劣ったものには与えられてない知性や専門性といったものを持っており、independenceであると信じていた」(Hunt 20)。ハントによるこのような記述は海外貿易を含めたビジネスが中産層としてのアイデンティティ確立の基礎となっていたことを感じさせる。また、海外貿易は中産層にとってほかの社会層と異なるという自意識を生んでいた。太平洋を見下ろすコルテスが想起させる海外貿易は、中産層の持つ“independence”という意識の拠り所でもあり、かつ経済的な富をもたらす有望なビジネスであったのだ。

ここから、先の引用をもう一度検証する。“feels himself a freeman in this vast theatre”という箇所であるが、太平洋を広大な劇場にたとえ、その中にいる様子を“freeman”と表した*The Hurricane*の作者であるWilliam Gilbertが1763年から1825年というキーツとほぼ同じ時代を生きたイギリス人であることは考慮すべき事実だ。彼の詩がJoseph Cottleによって出版されたBristolは1795年から1798年の間コールリッジやワーズワス、サウジーといったロマン派詩人の作品が生み出された場所でもあった。ギルバートと彼の作品はこれら前期ロマン派詩人たちに好意的かつ用心深く迎えら



れていた。特にギルバートの『ハリケーン』の註をワーズワスは「近代のイギリスの散文の中で最も美しい一節の一つ」と『逍遙』の中で称賛している。キーツがどれだけワーズワスの『逍遙』の引用に影響されたかはともかくとして、キーツと同時代に生きる一作家が「太平洋発見」の際の探検家の心情を示すのに用いた“freeman”という言葉からは、当時の時代背景を考慮すると、自身を“independence”があり、他の社会層とは異なると自負していた中産階級をイメージすることが可能である。以上より、このコルテスのイメージからは、単なる帝国主義的な側面というよりも、中産階級のアイデンティティの1つであった“independence”という精神的側面も見出すべきであるのだ。

キーツはソネットの中で、コルテスとその仲間たちをまず、おのおの別々に描写している。そのことはあたかもコルテスが「広大な劇場に立っているがごとく」(*The Excursion* (1814), III 931n), 独立した一個人として、「新発見」の場にいることを読者に印象付ける。またキーツはチャップマン訳のホメロスをあくまで、「鷲のような目で見つめる」(‘On First Looking into Chapman’s Homer’ 11) のであって、完全に心酔しているのでも、敗北感を感じているのでもない。ギリシア神話の世界に憧れつつも、コルテスが象徴する“independence”の精神を、キーツ自身が失うことなく持っていたといえる。こうしたキーツの姿勢は、このソネットのすぐ後に書かれた‘Sleep and Poetry’の一節からも明白だ。

..... yet there ever rolls  
 A vast idea before me, and I glean  
 Therefrom *my liberty*; thence too I’ve seen  
 The end and aims of Poesy.           (‘Sleep and Poetry’ 290-93, italics mine)

ここにも、巨大な思想を目の前にしてもひるむことなく、自らの選択の自由を行使しようという独立心を表明するキーツの姿が見て取れる。

#### 4. 視点の拡張

Newey はあくまでキーツは「太平洋を鷲のような目でじっと見つめていたときの勇敢なコルテス」のように感じたのであって、仲間たちの描写とキーツの感情との直接的な関連性はないと考えるが、(Newey 184) コルテスの仲間の描写にも注意を払う必要がある。それというのも、キーツはコルテスの太平洋発見にあたって、コルテスの仲間たちの描写にコルテスと同じ分量を費やしているからだ。

注目すべきはコルテスが「太平洋を見つめていた」のは“star’d” (‘On First Looking into Chapman’s Homer’ 12) と過去形で書かれているのに対し、コルテスの仲間たちが顔を見合わせているところは、*The Examiner* に掲載するための清書では、現在形で‘Look’と変更したという事実である。これは“‘When a new planet swims into his ken” (10) が現在形となっているのと同様、一見目を惹くコルテス

自身のまなざしではなく、彼の仲間たちの反応こそが、新発見に伴う普遍化された感情だということではないだろうか。このソネットで言われる「新発見」はコルテスにしる、バルボアにしる、彼らの成し遂げた特定の「新発見」という歴史的事実としての枠組みを脱し、キーツ自身のさらには読者も含むすべての人にとって、普遍化された体験となりうるものだ。そうした体験に際してのコルテスの仲間たちの反応は、“Look'd at each other with a wild surmise” (13) というものである。つまり“with a wild surmise”「根拠はなくとも目の前にあるものを受け入れ確信を抱き」、*“Look'd at each other”*「その感情をお互い共有しあう」という姿勢は、アスクの指摘する偉大なものを目の前にし、自らの卑小さを感じ、屈服する“belatedness”のようなネガティブな感情とは異なる。このコルテスの仲間の反応は、美しいものを“the food /Of my delighted fancy”「常に楽しい空想の糧」(‘How many bards gild the lapses of time!’ 2-3) として受容し、自らの詩作の推進力にするキーツ自身の姿と重なる。

さらにキーツはコルテスとその仲間たちを太平洋発見に際し、「ダリエンの頂」(14) に立たせている。ここでは見る側がその対象を見下ろす構図になっている。必ずしもキーツが古代ギリシアの光輝に感服していたのではないことが窺える。Ian Jack は“in the sestet Keats designs his own ‘historical painting’, ‘stationing’ Cortez so as to dominate the scene” (Barnard 571) とコルテスが太平洋をはるか下に臨む描写をキーツが意図的にしたことを指摘している。それだけでなく、キーツは最初にコルテス、続いてその仲間、最後は彼ら全員が立つ岬を遠くから眺めているように描写していく。個から集団へ、さらには風景の一部として彼らを描くことで、このソネットが一個人の一感動を詠ったものではなく、他者と共有可能で、かつ「新発見」というチャンスはこれからの時代にも永続的に与えられていくという希望を示していると考えられる。

## 結論

キーツがチャップマン訳のホメロスのたとえとした「新たな惑星」(10) も「太平洋」(12) もいずれも、近代の人々の知恵という恩恵によってもたらされた「新発見」の産物であった。天体は、当時の技術革新という背景とクラーク学校での生きた太陽系儀の授業が与えた影響からキーツにとって手の届かぬ対象ではなく、むしろ身近な存在になりつつあった。さらにはコルテスが見下ろす海は、中産層の持つ“independence”という意識の拠り所でもあり、かつ経済的な富をもたらす有望なビジネスである海外貿易の象徴でもあった。キーツがチャップマン訳のホメロスを読んだ後に感じたのは“belatedness”というよりはポーブ訳では感じることはできなかった親近感や希望であり、キーツにとってのホメロス再発見であった。

当時の学問の先端を行っていた天文学は芸術を凌駕し、貿易の盛んだったイギリスは世界の海を掌握し、貿易商人として活躍したり、商人でなくとも自ら“independence”を持つと自負する中産層は、他の階級を凌駕しつつあった。こうした変動する時代の中、ポーブとは異なり、キーツのような古典教育を受けていない中産層にも、ホメロスという偉大な詩人の雄大さを広く伝えたチャップマンは再評価され始めていた。チャップマンを通して知った古代ギリシアの栄光である“pure serene” (7)

に畏敬の念や “belatedness” を抱くのではなく、文字通り “breathe” (7) したキーツは、まさに「古代の遺産」を自身の創作の糧として自らの肉体の内側に取り込み、後の創作の血肉にしたといえる。「初めてチャップマン訳のホメロスを読んで」は、この後、‘I stood tiptoe upon a little hill’ さらには *Endymion* というギリシア神話を素材にしつつも、これまで語り継がれてきた神話とは異なる、独自の物語詩の創作を通じて「古代の遺産」の征服をねらうキーツの独立心と中産層の台頭を象徴しているといえる。

本稿のキーツの詩の引用はすべて、Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1978) に拠る。またキーツの書簡の引用は、Hyder Edward Rollins ed., *The Letters of John Keats: 1814–21*. 2 vols. Cambridge: Harvard UP, 1958. に拠り、第一巻は *LI* とする。

#### Works Cited

- Aske, Martin. *Keats and Hellenism: An Essay*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
- Barnard, John, ed. *John Keats: The Complete Poems*. 3<sup>rd</sup> ed. London: Penguin, 1988.
- Earle, Peter. *The Making of the English Middle Class: business, society, and family life in London, 1660–1730*. Berkeley: University of California Press, 1989.
- Hunt, R. Margaret. *The Middling Sort Commerce, Gender, and the Family in England 1680–1780*. Berkeley: University of California Press, 1996.
- Newey, Vincent. ‘Keats, History and the Poets.’ *Keats and History*. ed. Nicholas Roe, Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Roe, Nicholas. *John Keats and the Culture of Dissent*. New York: Clarendon Press, 1997.
- Rollins, Hyder Edward ed. *The Letters of John Keats: 1814–21*. 2 vols. Cambridge: Harvard UP, 1958.
- Stillinger, Jack, ed. *The Poems of John Keats*. Cambridge: Harvard UP, 1978.
- Webb, Timothy. *English Romantic Hellenism 1700–1824*. New York: Manchester University Press, 1982.